

出産と世話の現象学へ

森 一郎（東北大学）

『存在と時間』でハイデガーは、「可能性」を、実存カテゴリー——われわれ一人ひとりがそのつどそれである存在者たる「現存在」の存在規定——として重んじ、「最も根源的で最終的な、現存在の積極的な存在論的規定性」だとした。この可能性重視の考え方は、死を可能性として概念規定するさいに、端的に表われる。すなわち、「最も固有で、没交渉的で、確実に、それでいて無規定的な、追い越しえない、現存在の可能性」。この「実存一般の不可能性という可能性」が、徹頭徹尾「可能性として持ちこたえられる」ような、本来的な「死への存在」のことを、ハイデガーは「死への先駆」と名づけ、かつ、そこから汲みとられた「有限的時間性」を、存在論の基底に据えたのだった。

ハイデガーを読むとは、この「終わりへの存在」の思想にどう付き合うか、という問いを突きつけられることを意味する。そこから目を逸せば「非本来的」だと判別されることまで、ご丁寧にも織り込み済みである。だが、ハイデガーの最良の読み手たちは、へびに睨まれたカエル然と死の前に佇むことを潔しとせず、それとは別様の実存理解へと赴いていった。ここに、ハイデガー以後の現象学の可能性が拓かれたのである。

そのハイデガー自身、『存在と時間』の歴史性の章で、「終わりへの存在」とは別に、「始まりへの存在」という言い方をしており、「誕生の哲学」がそこに胚胎していたことが分かる。始まりに着目した「出来事について」の思考を、別の仕方で引き受けたハイデガー以後の現象学者の一人が、アレントである。『人間の条件』で、「可死性」に匹敵する人間の条件として「出生性」を打ち出し、それを「政治哲学の中心カテゴリー」に据えたのは、明らかに、ハイデガーとの対決を志してのことであった。その場合、「可能性」——これが昂じると「必然性」と化す——というより、むしろ「偶然性」——その行き着くところ「不可能性」に極まる——が、様相として重視されるのは言うまでもない。

死が、老衰して末期を迎えるときにはじめて問題となるのではなく、可能性としてつねにすでに現存在に切迫しているように、誕生は、生まれたての赤ん坊のみを特徴づけるのではなく、われわれが世界に参入しあらたな始まりを迎えることがそのつど「第二の誕生」なのである。生まれ出ずる者たちの孕む「出生性」がそのように、ふと——「独立なる二元の邂逅」のはずみで——「現実化」することが、イコール「活動」なのだ。伸るか反るかアクションは、不発や挫折や破滅を引き起こす危うさを秘めている。

「可能性の実現」モデルと似て非なる「偶然の出来事」は、それゆえ、不確定性を免れない。事を為す者は、^{ポテンシャル}可能事とにかく挑んでみるという勇氣ある率先行動のみならず、^{アクシデント}偶然事を持ちこたえるというねばり強い構えを、いったん事が為されるや否や、のちのちまで求められる。偶然性の根絶が、活動そのものの否定である以上はそうである。そうした「事後的耐久力」は、約束を守るといふ活動に如実に表われるが、それにとどまらず、

活動全般を^{テンポラル}時間的に制約するものである。始まりは、生み出されたあと、助けられ、支えられ、育まれ、守られることで、はじめて始まりとして成就する。

始まりを生み出すことは、単独で為しうることではない。「独立なる二元の邂逅」から出来る活動は、「複数性」を条件とする。このことは、事後的にもそうである。誕生という出来事が、赤ん坊を受け入れる側なくしてありえないように、あらたな始まりは、それがあとあとまで存続するように、保たれ、受け渡されてゆくべきなのである。放っておけばすぐ滅びてしまう人間の業を、しぶとく保持してゆくためには、それが共同事業とならねばならず、しかも、個人の生死を超えての連係プレーとならねばならない。

ここに浮上してくる問題現象が、「世代」であり、もっと言えば「世代継承」である。

世代という現象は、出生性と複数性を条件として成り立つが、さらに可死性も、世代の条件に属する。これはなにも、旧世代が去らなければ次世代が遮られるからだけではない。死すべき者たちが、おのれの退場ののちにも、現にある世界が存続することを欲し、そのために尽力する、ということが、世代交代の可能性をともに形づくるからである。

終わりへの存在が、おのれの終わりを先取りしつつ、別の始まりを産み、育てること。これは、「死への先駆」のヴァリエーションではあるまいか。生まれることが、産むことと一つであるように、始めることは、始まりを迎え入れ、栄えさせ、見守ることと一つである。介助するという契機は、事を為すことのみならず、物を作ることにも見られる。総じて、「出産（ポイエーシス）」には、生まれたものを「世話すること」が属するのである。